



金屋町通信

発行元：

金屋町まちづくり協議会

発行責任者：般若陽子

編集責任者：般若慎一郎

10月3～7日に大和高岡店での「工芸都市高岡2013クラフト展」を中心に、約10のイベントをからめて「高岡クラフト市場街」が開催されました。

金屋町では「かんか」において「作家のひきだし展」が開催された他、ローカルキッチンやワークショップが行なわれ、多くの人が金屋町を訪れました。

クラフト×食

たかおかローカルキッチン

10月3～7日の期間限定で金屋本町の小泉家において、高岡産の食材を使った料理を高岡産の漆器や金属の食器で味わうというレストランが営業しました。



写真はちらし寿司膳。食器はこの日のために高岡漆器青年会が製作、コップや茶碗も地元作家の作品、おしぼりは錫紙に載せてある。

メインの料理は地場産野菜をふんだんに使った「野菜のちらし寿司膳」および「ジュンブレンドサラダセット」（どちらも千円）です。他にも地場産材料を使ったスイーツと飲み物もありました。

平日でも11時の開店と同時に満席になり、その後は時間待ちという人気ぶりでした。

まち歩きワークショップ①

照明探偵団

夜の金屋町ライトアップ大作戦

10月4日夜7時から、復元された東京駅舎照明デザインなどを手がけた照明デザイナーの面出薫さんを講師に招き、首題のワークショップが行なわれた。

まずは宗泉寺において30分ほど、面出さんが手がけた多くの建築物などの事例を写真で紹介しながらの講義があり、続いて般若陽子さんが約10分間ほどで手短かに金屋町を紹介した後に、参加者一人一人が小型のLED懐中電灯を手に金屋の町並みへ出ました。

まず大寺幸八郎商店の前へ行き、店内の照明を半分ほどにし街灯を消灯した上で、一斉に懐中電灯を向けて大寺家を照らしたり、少し赤っぽいフィルターを通して照らしたりして、微妙な違いを見る実験をしました。



大寺家の前に金属製灯籠やぼんぼりを並べてみたりもした後に移動して、喜多家の銅板外壁を照らしたり、畠家や金森藤平家の前庭の木を照らしたりもしました。



面出さんは「照明デザインとは陰影をデザインすること」「闇や影が大切」「光の量ではなく品質が重要」「照明器具は無い方が良い」などと、逆説的な表現で持論を展開しましたが、照明デザインという自分にとって未知の世界を垣間見させていただきました。

まち歩きワークショップ②

目指せ、クリエイティブな 空家活用



10月6日午後1時から、NHKの大河ドラマ「八重の桜」のオープニング映像などを手がけている映像作家の菱川勢一さんを講師に迎え、金屋本町の小泉家を起点に首題のワークショップが開催された。

まずは加藤昌宏さんが金屋町の歴史と町屋の構造を説明した上で、現在一人暮らしで近いうちに転出し空家になる見込みの大門家を見学しました。その後鋳物資料館へ立ち寄り、新幸橋を通るルートで沿道の由緒を解説しながら山町筋を経由して高岡ホテルへ移動しました。

高岡ホテルは広大だった庭などが大幅に縮小されていますが、大正時代の建築物である本館が大事に保存されています。その昔映画「裸の大將」の撮影現場になったという広い応接間で、ぜんざいをご馳走になりながら女將の話を聞き、その後館内を見学しました。現在では宿泊部門の営業はしていないが、宴会など食事部門を営業しているそうです。

その後、まちっこプロジェクトが空き家を取

得してゲストハウスに活用しようとしている「本町の家」を見学し、やはりまちっこプロジェクトが空家を改装して営業している「メリースマイルカフェ」において意見交換しました。この建物は1階がカフェで、2～3階は富大芸文学部の女子学生がシェアハウスとして活用しているものです。

菱川さんは徳島県神山町の空き家を改築しサテライトオフィスを構えています。この神山町は本来過疎化に向かっていて高齢化の小さな町なのですが、今県外からのサテライトオフィスや移住者を増やしていて、再活性化の成功事例になっています。そんな菱川さん自身の経験から、高岡にはいいところが沢山あるのに情報発信が弱いので、都会の人から高岡ってどこ？と言われている。とにかく情報発信を強化することが大切だと感想を述べていました。

心臓マッサージなど

救命講習会



10月5日（土）9時～正午、金屋町公民館において約50名の住民が参加し、心臓マッサージ、人工呼吸、AEDなどの実技訓練に励みました。ちなみに金屋町自治会は独自に自前のAEDを所有しており、これまで島作商店に置いてあったのですが、現在は鋳物資料館に置いてあります。金屋町には複数の医療施設がありますが、それぞれの医療施設にも設置されているので、AEDには恵まれた環境になっています。